

教団改革運動と女性

——ジェンダー宗教学の視点から——

代表者 川橋 範子

コメンテーター・司会 小松加代子

開かれた伝統仏教教団と

ジェンダー宗教学の交差するところ

川橋 範子

現代の仏教界の沈滞と硬直ぶりは、マスメディアを中心に広く批判されている。その根底には、仏教教団あるいは僧侶の多くが「聖職者」と「俗人」という二面的なあり方を功利的に使い分けていることに対する批判があるのではないか。日本仏教の歴史の中で仏教がゆがめられて伝えられ、誤読された形で受容されていったありようは過去のものではなく、現在にも引き継がれている。この過程を明らかにし、軌道修正を行うために、ジェンダー宗教学の視点が必要なのである。筆者と田中雅一は、共編した『ジェンダーで学ぶ宗教学』の中で、社会の周辺に位置する女性たちの声に耳を傾け既存の男性中心主義的な価値観を疑いの眼で見る、ジェンダー宗教学の重要性を強調した。ジェンダーは、価値中立的な概念ではなく、性別にかかわる差別と権力構造を明らかにする視座である。ジェンダーの視座をもつ宗教研究は、宗教における女性の周縁化と不可視化に

批判の目を開かせ、男性中心主義が生み出した解釈や価値観を疑わせる。欧米の宗教研究では、ジェンダーあるいはフェミニズム理論の視点から仏教を批判的に検証して再構築を試みる研究が多く発表されているが、日本での動きは鈍く、ジェンダーの視座からの現代日本仏教の改革運動に関するまとまった研究は極めて少ない。日本の仏教研究と仏教界の両方において、ジェンダーあるいはフェミニズムの問題は、依然積み残された課題といえる。宗教は女性にとって解放にも縛りにもなる。この状況下で、女性が主体的に宗教的であることはどのような意味を持ち、いかに実践されるのか。この問いに答えるために、フェミニスト民族誌の視点から、超宗派の女性たちによる仏教改革運動のネットワーク活動を記述していきたい。筆者がかかわる運動は、女性たちの経験の中から従来の男性中心主義的な仏教史や教義を読み替え新しい仏教のヴィジョンを提示しようとする営みである。このような運動の背景には、日本の既成仏教教団が、女性僧侶や僧侶の配偶者や女性信者など、女性たちを教義と制度の両方において周縁に位置づけてきた現実がある。仏教教団では多くの場合、女性たちの位置づけは性別分業に拘束され、女性仏教者としての主体的な自己理解が反映されていず、女性僧侶や僧侶の配偶者や女性信者など、女性たちを束縛する。ジェンダーの性差別問題を論じる場にもほとんど参入できなかった。本発表では、男性中心主義のもとで不可視であった彼女たちの語りの記述によって、主流の男性中心主義の語りから脱中心化していくことを目指している伝統仏教教団に挑戦する女性たちが、教団を去るかあるいはその中で沈黙して生きるかの二者択一的な道を選ばずに、既存の価値基準を持てる資

源として部分的に活用して不都合な状況と交渉しつつも、けっして抵抗をあきらめず、批判者改革者として宗教教団内にとどまるメカニズムを解明していきたい(詳しくは、川橋範子「現代日本の仏教とジェンダー——フェミニスト仏教は開花するか?」末本文美士編『新アジア仏教史15 日本V』佼成出版社、二〇一一年を参照されたい)。

アメリカの浄土真宗における女性たち

本 多 彩

アメリカでは仏教に関心を持つ人が多くなってきたといわれている。アメリカで最も古くから活動している教団が浄土真宗本願寺派である。現地での組織は北米開教区、Buddhist Churches of America (BCA) と呼ばれる。宗派は同じであっても、国が変われば人びとのジェンダーに対する意識も異なってくる。ここではアメリカの本願寺派における女性について考察する。

まず、BCAの中で現在唯一の全米組織を持つ仏教婦人会がある。この団体は、百年以上前に日本人移民女性によって仏教会(寺院)の教化団体として組織された。戦前は、仏教会の周縁にあるとみなされ、その活動が認知されることはなかったが、メンバー(門信徒)の細やかな変化にまで対応できるような組織を作りあげていった。第二次世界大戦後は、二世が戦前からの活動を継続しながらもそれらを柔軟に変化させ、安定的

な経済力をもって仏教会での存在感を高めていく。現在は二世から三世、そして異なるエスニックグループも包括している。彼女たちは「女性のみが入会可能な組織である」ことは政治的にはあやまり (politically incorrect) であることを自覚し、それをふまえて、さらなる会の発展を目指している。

アメリカでは多くの女性僧侶が活動している。男女がほぼ同数の組織もあるといわれている。BCAでは女性僧侶の数が大変少ない。その理由のひとつとして、人事異動を挙げることもできると思うが、まず僧籍をとるのに男女の区別がない宗派である。実際には僧籍を取りたい、もしくは作法や教義を勉強したいと思っている女性は大変多い。

十年ほど前に始まった Minister's Assistant Program は、メンバーから本格的に学びたいという声があがったことから始められた。これは、本願寺派の勤式作法や教えに関心を持つ人たちが、各仏教会そして開教区本部で研修を積むプログラムである。参加する人たちは、男女がほぼ同数である。僧籍を取りたいという人たちのためのプログラムも別に用意されている。こちらの参加者も男女の数が拮抗しており、実際の僧籍取得者は男女半々、そして多様なエスニックグループを見ることができる。また仏教会では十代後半から二十代の世代の不在が問題とされてきたが、こうした若者のなかからもより深く学びたいという人たちが出てきたことから、Youth Minister's Assistant が結成された。例えば今年は、参加者のおよそ三分の二が女性である。

アメリカで活動する宗教団体はすべからずジェンダーに向き